

## ルーブリックを使用した学外実習評価基準の作成について

中嶋 一恵・浦川 末子・白石 景一・  
下釜 綾子・永野 司・中村 浩美・  
中嶋 健一郎\*・滝川 由香里・本村 弥寿子

Development of a Rubric for Practical Training of Nursery and Kindergarten Teachers

Kazue NAKASHIMA・Sueko URAKAWA・Keiichi SHIRAISHI・  
Ayako SHIMOGAMA・Tsukasa NAGANO・Hiromi NAKAMURA・  
Ken'ichiro NAKASHIMA・Yukari TAKIGAWA・Yasuko MOTOMURA

キーワード：ルーブリック、学外実習評価、学外実習指導

### I. はじめに

平成20年に出された中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」において、大学教育に対する質の保証が求められ、学生の学習成果を重視した教育活動の必要性が指摘された。この背景には、日本の大学における教育内容・方法、学修の評価を通じた質の管理が不十分であるという危機感があり、それを払拭するために大学自身による改革の必要性が強調されたのである。この答申の中で、改革のために明確にするよう求められたのが、「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」「入学者受け入れの方針」の3つの方針を定めることであった。つまり、大学卒業時の出口管理、在学中の活動、入学時の入口管理という、学生が入学してから卒業するまでの学修の設計図を示すことを各大学に求めたのである。さらに、そのための教職員の職能開発や質保証システムを強化することなども提言がなされ、実質的に大学教育の質の向上を目指すことが要求されたのである。

この中で、本論が特に注目するのは、出口管理すなわち成績評価である。答申の中で、「評価についても、わが国の大学においては、個々の教員

の裁量に依存し、組織的な取組が弱いと指摘されてきた。「大学全入」時代の学生の変容に際し、学生確保という経営上の要請も相まって、従来そのままでは、なし崩し的に安易な成績評価が広がってしまう恐れがある」と大学教育の質低下が懸念されることから、客観的な評価システムの導入と組織的な学修の評価が求められている。

さらに、平成24年3月に公表された中教審答申「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」では、前述した3つの方針をより一層推進し、学士課程教育の質的転換の促進が求められている。「学士課程教育は、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育が保証されるよう、質的に転換する必要がある。」<sup>1)</sup>そして、大学は早急にそれに取り組む責務があるとしている。その中で学生による授業の事前準備や事後の展開、体験活動などの学修時間の確保が必要であり、学生の学修成果の把握を大学が組織的に体系づけていくことを求めている。このために、アセスメントテストや学

\* 現広島大学大学院教育学研究科講師

修行動調査、ルーブリックなどを活用することを薦めている。

これらを踏まえ、本学幼児教育学科では、学生の学修成果だけでなく本学科の教育評価を行う仕組みである教育評価システムを構築した<sup>iii</sup>。これは履修カルテをベースに、入学から卒業までの教育だけでなく就職先や実習先からの評価も含めた本学科の教育全体を評価するものである。つまり、教育評価システムは、学生の学びを評価・査定するものではなく、学生に対して教員が効果的な教育を行っているかを包括的に評価・査定するためのものと言える。昨年度受けた短大基準協会による第三者評価においても、このシステムが評価され、さらに全学的に組織化していくことを進言された。そのため、この客観性をより高めることを目指し、ルーブリックを指標とした評価に挑戦することにした。

特に、従来より課題になっていたのが、学外実習における実習先からの評価の基準のばらつきである。評価票には、おおまかな基準を記載しているものの、どうしても実習指導者の主観がその評価の基準となるため、指導者間で差が出てしまうことは否めない。例えば、実習指導者が実習を皆勤で終えた学生を「普通」、すなわち社会人としての基礎が身についていると評価した場合、その学生の勤務態度に関する評価は高くはないだろう。一方、実習を休みなく行うことは大変なことであり、よく頑張ったと評価した場合、学生の評価は高くなるだろう。このように、実習を皆勤で終えるという結果について、指導者がどのように考えるかによって、同じ結果であっても指導者間、あるいは実習園間で評価に違いが生じる。これは、教育の質保証を実践する上で検討すべき問題であろう。そこで、本学科では、2012年度入学生からルーブリックを指標とした評価を活用することを試みた。本論文は、その実践の報告である。

## II. ルーブリックとは

ルーブリックとは、「いくつかの段階に分けて教育上の達成度の目安を記述して、学習者の達成度を判断する基準を示したもの」<sup>iv</sup>である。従来

の試験とは異なり、学習者が学んだ結果のうち、特にパフォーマンス（高次の思考や判断、スキルなど）の評価をするのに適しているとされ、第三者にも観察可能な行動指標の特徴をもとにして作成される。これは、アメリカにおいて先進的に開発され、多くの高等教育機関が導入して積極的に活用している。そのため、近年日本においてもアメリカの取り組みの紹介や報告がなされている（e.g., 笠原 2011；吉田 2011など）。また、わが国のルーブリックの実践は、初等中等教育を中心に行われているが（e.g., 鈴木 2011；山口 2013など）、前述したような客観的な評価システムの必要性から、大学における導入を推進していく状況にある。

ルーブリックは、一般的に横軸が「観点」、縦軸が「段階」とされ、観点ごとに段階が一目でわかるように作成された評価基準表の形式になっている。（山口 2013）そのため、評価する側は学生の学修到達度をその基準に則って評価することになり、主観的になりがちなパフォーマンスの評価をより客観的な視点で行うことができる、評価者が複数いる場合の評価が標準化される、などの利点がある。また、評価結果を総合的に捉えることにより、教員にとっては自分の授業の振り返りを行うことができ、授業改善にもつながっていくことが期待される。一方、評価される側の学生はその活動の評価基準がわかるため、それを意識しながら学修活動を行うことができるとともに、その結果から自己課題を認識し、その改善に取り組みやすいこともメリットとしてあげられる。

ところで、沖ら（2012）の研究では、高等教育にルーブリックを導入するにあたって、気をつけるべき点を3つあげている。①成績評価がどのように行われているか学生に見えること、②成績評価が公平で客観的かつ厳格に行われること、③学修成果のフィードバックが行われること、である。これらを満たすために、各科目の到達目標ごとに評価基準を定め、学生に事前に提示することが必要だとしている。しかし、提示する際に欠かせないこととして、鈴木（2011）は、「なぜそのような評価を行うのか」「どのような基準で評価を

行っているのか」ということを、学生が理解することをあげている。もし、理解できていない場合には、評価者が求めるような効果、すなわち学生の理解度確認や学修改善にはあまり期待ができないことを研究結果として報告している。

では、ルーブリックを作成する手順であるが、山口（2013）は小中学生対象の教科のルーブリック作成について、次の3ステップをあげている。

①事前に予想される児童生徒の様々な振る舞い方（問題、課題への解法）を、可能な限りリストアップする。

②複数の教師（できれば3人くらい）で、リストアップされた解答パターンや振る舞い方を段階に分けて採点する。その際に、複数の教師の間で、その段階にした理由をつき合わせて、合議の上で練り上げていく。

③②の作業をしながらルーブリックのすべての段階を埋めていくことで、リストアップされた解答パターンを採点していくルーブリックがほぼでき上がる。もし、新しい解答パターンが生まれた場合には、ルーブリックに追加していく。

ただし、このルーブリックを作成する際には、その尺度に、確実な順序性や段階があることを意識しておくことである。たとえば三段階でのルーブリックを作成した際に、1から2へ、2から3へとその段階を追って行動レベル（パフォーマンス）が発達していくことを前提として作成される必要がある。もっとも低いレベルの行動指標が、学習の結果、高いレベルのそれに移行していくように作っていくのである。

以上のような点を踏まえながら、学外実習の評価基準をルーブリックの形式で作成を行った。

### Ⅲ. 学外実習評価におけるルーブリックの作成と手順

まず、学外実習評価をルーブリックに変更することを検討した理由は、従来の評価票では各実習先の評価基準に差が認められたからである。つまり、従来の評価項目と数値尺度を記したものではその基準があいまいなため、評価者の主観が基準となりやすい問題があった（図1）。これは、本

学で依頼している実習幼稚園は約60園、実習保育所は約80園あり、実習園の数だけ基準が出てくることを示している。そのため、同じ学生でも幼稚園での実習と保育所での実習の評価に大きな差異が認められることもある。また、例えば実習生に提出物の遅れがあった場合に、遅れたことそのことを評価して2や1の評価をつける実習園もあれば、遅れたことには問題があったが指導を受けた後に改善がみられたとして3や4の評価をつける実習園もある。このように、実習園が評価の基準をどこにあるいはいかに置くかによって評価に差が出てくるとするならば、本学における実習後の指導についても差が出てくることになる。実習評価にある程度の客観性や標準化が認められないことは、学外実習が学生の意欲や意識を高め、学生の将来を見定める1つの目安になっていることを考えれば、決して好ましいことではない。こうした評価基準の差をできるだけ標準化することを意図して、ルーブリックによる実習評価を検討することにした。

まずは、1年次後期にある施設実習のルーブリックを作成することにし、第一著者が考えた案を学科会議で検討しあって進めていくことにした。取りかかり始めて最初に課題になったのは、従来の項目（図1）をもとにルーブリックの基準を作成すると、従来の5段階で差異化することが難しいことや、評価基準の文言が長文になることであった。例えば、「実習姿勢」の評価項目として「指導を受ける態度」「保育者としての態度」「積極性」「協調性」をあげているが（図1）、これらすべてを網羅しながら基準の段階性をつけていくためには5段階では足りず、その差を細かく表現すると文が長くなり、それを読むこと自体に抵抗を感じてしまいそうであった。また、長文になると差異がわかりづらくなるということもあげられた。

そのため、まず各項目を1つの内容に整理して従来の6項目を12項目に増加し、基準を作成することにした。そして、それぞれ5段階の評価基準を文にしていった。これを、学科会議の議案として検討したところ、実習園の負担を考えると12項

図1 従来の評価票

評価基準〔5 良い 4 やや良い 3 普通 2 やや努力が必要 1 努力が必要〕		※該当する数字に○をつけてください。					
実 習 態 度	勤務状態	遅刻、欠席 健康管理	5	4	3	2	1
	実習姿勢	指導を受ける態度 保育者としての態度 積極性、協調性	5	4	3	2	1
	責任感	仕事に対する責任 連絡、報告、提出物	5	4	3	2	1
指 導 性	計画性	準備、教材研究 個の生活課題の把握	5	4	3	2	1
	保育技術	チームワーク 個の生活課題への配慮と指導	5	4	3	2	1
	観察力	記録内容 (記録能力、自己評価と反省)	5	4	3	2	1

目は多すぎることに、5段階評価基準のことばがいまいなところがあり、差異がわかりにくいことがみえてきた。そのため、この会議でこの案を基盤に項目を精査して次の7項目にした。①勤務状態（遅刻・欠勤・体調管理）②指導を受ける態度（素直さ・積極性）③保育者としての態度（挨拶・笑顔・言葉使い・明朗さ）④責任感（報告・連絡・相談・提出物）⑤計画性（見通しを持った仕事）⑥保育・支援技術（利用者の理解・利用者との接し方）⑦観察力（記録内容・書き方・自己評価と反省）。そして、前章に記述した山口（2013）が手順で述べていたように、その基準を作成するために、現場経験者、そして教育学・心理学を専門とする教員ら計4名が担当となって再度案を作成し、その後学科会議で最終的に決定することにした。

こうして担当で協議をしながら基準を作成していったのであるが、各項目の基準を段階的に細かく表現することが非常に難しく、5段階では作りにくいことがわかった。そのため、段階を4つにわけそれを肯定的評価2つ否定的評価2つで表現することとした。そして、その4つの段階よりもすばらしく良い場合と非常に評価が低い場合を1つずつ加えて、6段階評価とし、1または6をつける場合は理由を記述してもらったこととした。こ

れをそれぞれの項目で1行におさまるように留意しながら基準を作成していった（図2）。作成する中で特に難しさを感じたのが、基準の2と3の違いと4と5の違いを相手に伝わりやすいことばで表現することであった。これまで、自分たちが学生を評価する際に、点数化可能な試験は別として点数化が難しいいわゆるパフォーマンス評価を具体的なことばにして行ったことがないため、どうしてもあいまいなことばで表現してしまう。相談しながら作成している4名の間にも、ことばの使い方や捉え方に違いがあり、微妙なニュアンスを理解し合うのに時間がかかった。これを第三者である実習園の指導者が参考にするには、できる限りあいまいな表現を使わず、的確に誤解なく表現することが肝要である。こうしてできたルーブリックを再度学科会議にかけ、最終的に調整した。そして、これを実習先の施設長2名に見せ意見をいただいて完成させた。ただし、このルーブリックに突然変更することは実習先が形式に慣れておらず抵抗があることも考えられたため、とりあえず「参考資料」として評価票に添付する形で実施することにした。

さらに、この施設実習のルーブリックをベースに同様の手順を踏んで幼稚園・保育所実習のルーブリックも作成し、これを実習にて使用した。

図2 作成したルーブリック（一部）

	評価項目	評価基準
①	勤務状態 〔体調管理 遅刻・欠勤〕	6 評価基準 5 以上に特筆すべき点があった 5 遅刻や早退、欠勤もなく、健康管理も良好であった 4 体調がすぐれない日があったものの、遅刻や欠勤はなかった 3 体調も良く実習を行えたが、1・2回欠勤や遅刻・早退があった 2 実習期間中、体調がすぐれないことが多かった 1 評価基準 2 以上に憂慮すべき点があった
②	指導を受ける態度 〔素直さ 積極性〕	6 評価基準 5 以上に特筆すべき点があった 5 指導や助言を素直に受け止め、自分で仕事を探すなど、積極的に仕事をした 4 指導や助言を素直に受け止め、同じ指導を受けないよう、前向きに仕事をした 3 素直さはあり、決められた仕事はしたが、質問や積極性が少し足りなかった 2 指導者の指導や助言を素直に受け止めることができなかった 1 評価基準 2 以上に憂慮すべき点があった

また、実習評価用のルーブリックを作成するにあたり、同じ内容で学生向けにことばを変えた自己評価票も作成した。学生には実習前に評価項目を示して内容を説明し、実習に向かうための意識づけを行った。そして、実習後には自己評価票で自分の実習を振り返らせ、その後実習園からの評価票と突き合わせながら事後指導を行った。

#### Ⅳ. ルーブリックに対する反応と課題

今回ルーブリックを作成することにより見えてきた効果は、以下の2点である。

① 養成校が求める実習評価の基準を実習園に具体的に伝えることができる。

前述したように、実習評価の基準が実習園によってさまざまで、養成校が期待する基準よりもはるかに高いものを求めるところもあった。しかし、ルーブリックの形式で実習評価の基準をこちらから提示することにより、実習園に対してこちらがどのような実習を期待しているのか、そしてどのような保育者を養成しようとしているのかを伝えることができる。このことは、実習園と養成校が協力して保育者養成を行うことにつながることになる。また、学生にとっても実習が学内での学修を実践する場として位置づけられ、また実習での課題を学内で学びなおすという一連の流れができ、効果的な学修が可能となる。

② 学生の意識づけと振り返りが効果的にできる。

今回ルーブリックと同内容の自己評価票を作成した結果、学生自身が実習で何を学んでくればいいのか視点が定まると同時に、実習後の振り返りを行う際の基準となった。これにより、①で示した養成校と実習園との二者関係に学生が加わって、関係する三者が同じ基準で実習を理解し実習を評価することができることになる。学生にとっては実習園からの指導を理解しやすくなり、お互いの信頼関係を築くことにつながることを期待される。また、学生自身が自分の課題を認識しやすくなるため、課題の改善を行いやすくなることもメリットとして考えられる。

次に、現時点における課題についてあげておきたい。2012年入学生からルーブリックを始めたため、実習園に対してルーブリックそのものに対する感想や評価についての調査はまだできていない。しかし、実習先から問い合わせや苦情などはなく、思ったほどの反応や抵抗もみられなかったことは驚きで、実習先にとって実習評価の変更がそれほど問題にならないものなのか、あるいは今回のルーブリックが適切であったからなのか、その理由を判明させることは今後の課題としたい。

また、実習園に記入してもらった評価票とは別に、ルーブリックを「参考資料」として添付したため、ルーブリックをどれだけ参考にして評価してあるのかわからない。それは、実習評価票の6をわざ

わざと消去しているものや、すべて6をつける、または逆に1をつけてはあるが理由がわからないなどがみられたからである。これについては、今年度「参考資料」として添付したことで実習園に対しルーブリックの導入を印象づけることができたため、次はルーブリックそのものを評価票として使用するよう書式を変更することで改善を試みたいと思う。

また、段階の問題であるが、ルーブリックは6段階にしたものの、総合評価は実習園がつけやすいようにと従来通りの5段階のままで行った。このことについて、実習園から問い合わせはなかったものの、各項目の評価と総合評価の段階が異なっていることが評価しづらさにつながる可能性も否定できない。この点については、今後ルーブリックに関する研究資料を渉猟しながら、どのような修正が可能であるか検討していきたい。

## 参考文献

- ・中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」2008年。
- ・笠原千絵「学習成果の評価方法とルーブリックの活用—アメリカの高等教育関連団体と大学におけるインタビュー調査から—」『関西国際大学紀要 12』2011、37-46頁。
- ・鈴木雅之「ルーブリックの提示が学習者に及ぼす影響のメカニズムと具体的事例の効果の検討」『日本教育工学会論文誌 35』2011、279-287頁。
- ・吉田武大「アメリカにおけるバリュールーブリックの動向」『教育総合研究叢書 4』2011、1-12頁。
- ・中央教育審議会答申「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」2012年。
- ・山口陽弘「教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第62巻』2013年、157-168頁。

---

<sup>i</sup> 平成20年中央教育審議会答申、p. 26。

<sup>ii</sup> 平成24年中央教育審議会答申、p. 1。

<sup>iii</sup> 本学科教育評価システムについては、次の論文を参照されたい。中島健一郎・中嶋一恵ほか「教育評価システムとその活用に関する研究：学生指導の事例から」『長崎女子短期大学紀要 第36号』2012年、p. 45-52。

<sup>iv</sup> 山口陽弘 2013、p. 160。